

93 肺癌患者に対する血中CA 125 測定の有用性について

県西部浜松医療センター呼吸器科¹, 胸部外科²

○長 晃平¹, 橋爪一光¹, 佐久間哲也¹, 高橋義彦¹,
獅子原孝輔¹, 半沢 雋², 柴 光年², 佐々木一義²,
斉藤雄史²

目的…CA 125 は, 胸膜の炎症, 癒着による反応性中皮細胞との関連を認める。肺癌症例14例に対して血中CA 125 を測定し臨床病期との比較検討を行なった。

対象…胸水貯留肺癌8例, 非貯留肺癌6例, 肺炎7例 (control)。

結果…肺炎患者血中CA 125 平均 30.4 ± 24.5 SD

非胸水貯留肺癌血中CA 125 平均 57.6 ± 37.1 SD

胸水貯留型肺癌血中CA 125 平均 541.7 ± 494.9 SD

肺炎と胸水貯留型肺癌及び非胸水貯留型肺癌と胸水貯留型肺癌の間に有意差を認めた。

95 肺癌患者における糖鎖抗原腫瘍マーカー・シアル化 Lewis^x (SLEX) の蛍光 EIA による検討

長崎大学医学部第二内科

○平谷一人, 福島喜代康, 小森清和, 朝長昭光, 林 敏明, 河野 茂, 神田哲郎, 広田正毅, 原 耕平

目的: 近年, CA19-9 など糖鎖抗原腫瘍マーカーが臨床に使用されるようになってきた。しかしこれら糖鎖抗原のうち構造の明らかなものは数少ない。我々は CA19-9 (シアル化 Lewis^a) と構造異性体であるシアル化 Lewis^x (SLEX) の胸水中における腫瘍マーカーとしての意義を前回報告した。今回は肺癌患者の血中における SLEX の腫瘍マーカーとしての意義を蛍光 EIA で検討した。

対象: 肺癌患者170例 (腺癌78例, 扁平上皮癌39例, 小細胞癌31例, 大細胞癌10例, 未分化癌9例, その他3例) を対象とした。対照群として良性呼吸器疾患181例を用いた。また, 健常者血清536名の Mean+3SD (148U/ml) を cut off point とした。

結果・考案: 148U/ml を cut off point とすると健常者での陽性率は2.6%であった。また良性呼吸器疾患では3.9%の陽性率であった。肺癌患者全体の陽性率は29.4%であり, 腺癌, 扁平上皮癌, 小細胞癌, 大細胞癌, 未分化癌ではそれぞれ41.0%, 25.6%, 12.9%, 20.0%, 22.2%であった。stage 別に検討するとⅠ期, Ⅱ期, Ⅲ期, Ⅳ期の陽性率はそれぞれ13.0%, 29.4%, 32.5%, 32.8%であった。我々の検討した SLEX は組織別では腺癌に最も高い陽性率を示し, 病期の進行につれて陽性率が高い傾向をしめした。SLEX は胸腹水と同様血中でも新しい糖鎖抗原腫瘍マーカーとして有用である。

94 肺癌患者におけるシアル SSEA-1 抗原 (SLX) 測定の臨床的意義

日本医科大学臨床病理科¹, 慈山会坪井病院²

○吾妻安良太¹, 河内重人¹, 久勝章司², 長谷川浩一²,
坪井栄孝², 仁井谷久暢¹

【目的】シアル SSEA-1 抗原は, 消化器系癌, 肺癌, 乳癌, 卵巣癌患者血清中において高値を示す例が認められ, 特に肺腺癌で高い陽性率を示すとされる。今回, その RIA キットが作成されシアル SSEA-1 抗原を測定する機会を得たので肺癌患者における同抗原測定の意義を検討した。

【対象と方法】対象は, 原発性肺癌78例, 良性呼吸器疾患52例のプール血清を使用した。シアル SSEA-1 抗原は, 大塚製薬大塚アッセイ研究所製の RIA キットを使用し cut off 値は, 38.0 u/ml とした。

【成績】腺癌42例中19例 (45.2%) に陽性を認め, Ⅰ期1/7, Ⅱ期2/5, Ⅲa期3/5, Ⅲb期1/6, Ⅳ期12/19とⅣ期において高い陽性率を示したが, Ⅰ期, Ⅱ期の早期症例においても陽性例を認めた。扁平上皮癌4/17 (23.5%) 小細胞癌6/16 (37.5%) 大細胞癌1/3 (33.3%) の陽性率で, 肺癌全体では30/78 (38.5%) の陽性率であった。良性呼吸器疾患では26.9%とやや高い陽性率であった。肺腺癌における CEA, CA 19-9, CEA+CA 19-9 との combination assay では, それぞれ75.6%, 61.0%, 78.0%と陽性率は, 上昇した。

96 I R M A 法による肺癌患者血清 T P A の測定

東邦大学第二内科¹, 同第一内科², 同中放核医学³

○芳賀恵美子¹, 林 恵子¹, 高橋 健¹, 沈在俊¹, 内田 耕¹, 河田兼光¹, 小堀加智夫², 宮地幸隆², 福島保喜¹

《目的》肺癌における血清 T P A は, 従来二抗体法の原理に基いて測定, 検討されてきたが, 測定操作に三日間を要した。今回, より短時間で測定可能な I R M A 法で血清 T P A を測定し, 二抗体法による測定値との比較検討を行った。《対象と方法》いずれも未治療時の原発性肺癌41例 (扁平上皮癌12例, 腺癌25例, 小細胞癌4例), 転移性肺癌4例, 肺炎9例, 肺結核9例, および健康人14例で, 早期空腹時に採血し, 血清 T P A を I R M A キット並びに R I A キット (第一ラジオアイソトープ研究所) を用いて測定した。《成績》I R M A 法による血清 T P A U/l (平均±SD) は, 原発性肺癌 217.38 ± 152.73 , 転移性肺癌 235.77 ± 132.18 , 肺炎 90.16 ± 50.11 , 肺結核 97.88 ± 41.91 , 健康人 48.88 ± 24.75 で, 原発性肺癌で有意 ($p < 0.01$) に高値を示した。病期別では, Ⅰ期+Ⅱ期 ($n = 6$) で 116.99 ± 63.89 , Ⅲ期+Ⅳ期 ($n = 35$) で 228.27 ± 156.57 と, 後者で有意 ($p < 0.01$) に高値を示した。同一血清での T P A を, 原発性肺癌22例, 肺炎3例, 肺結核6例, 健康人3例で, 二種の測定法で測定すると, 疾患群において, I R M A 法でより高値をとる傾向がみられた。《結論》I R M A 法による血清 T P A は, 肺癌患者において, より高値をとる傾向がみられた。